

青橋商店
AOHASHI GO NOVELS

陥落のエルフ王女姉妹

マリナ & ミリス



青橋由高
安藤智也
illustration

成人向け
ADULT ONLY

Story

母アイシャから受け継いだ可憐な容姿と気高き魂を持つ第一王女マリナ。母や姉とは異なるタイプの美しさと気の強さが魅力の第二王女ミス。そんなエルフ王国の誇る美姉妹はしかし、すでに卑劣な人間の魔術師ギユネイによってその身と心を無残に散らされていた。

「お父様に捧げたかったのに……」

許されない禁断の恋を利用して穢された姉。

「あたし、これ以上コザックを裏切れない……っ」

恋人の存在を秘密にするために落とされた妹。

だが、王女姉妹の悲運はまだまだ続く。

王城で徐々に顔を揃えた家族団欒の場を、ギユネイは淫獄へと一変させる。

「わたくしをどこまで辱めるつもりなのですか、あなたは」

望まぬ快楽を尻穴から与えられ身悶えるマリナ。

「やめて、コザックが起きちゃう、あたしのこんな姿、見せないで！」

恋人の眠る横で恥辱の愉悅によがり啼くミス。

そしてついに、血を分けた姉妹がベッドの上で残酷な対面を果たす。

「許して……ミリスの前でこんな恥を晒させないでッ」

「ダメ、姉様、あたしを見ないでえ！」

悲しみと絶望、そして背徳の牡悦に彩られた夜が今、幕を開ける。

「マリナ&ミリス 陥落のエルフ王女姉妹」

青橋由高 (著)
安藤智也 (イラスト)

目次

ミリス

マリナ

マリナ&ミリス

アイシャ

あとがき

電子版あとがき

6

56

105

157

160

162

(普段のパーティーとは別の意味で気疲れしますね、これは)

エルフ族だらけのパーティー会場の片隅で、禿頭の中年魔術師ギユネイは、自然に漏れ出るため息を誤魔化すためにグラスに口をつけた。

(会場のほとんどがエルフだと、さすがに私の居場所がありません)

英雄王と呼ばれるレオン王と、エルフの宝石とまで称されるアイシャ王妃が治めるエルフ王国では、定期的にパーティーが開かれる。そういったパーティーは、基本的には国外からの客を招いてのことが多い。外交や商談の場も兼ねているためだ。

このとき、表向きの顔としてはレオンとアイシャ、そして二人の娘であり第一王女のマリナの存在は大きい。

一方、暗躍するのは、人間の身でありながら国の政の中心に立つギユネイだ。

相手の心理を的確に読むスキルと巧みな話術とで、エルフ王国に有利な条件を引き出したり、あるいは貴重な情報を得たりもする。

(かと言って、立場的に抜け出すのも困難ですし、誰か暇そうな方でも見つけますか)

しかし、今夜のパーティーには国外からの招待客はいない。レオン王がたまに主催する、慰安的な宴だからだ。

「ギュネイ、今夜くらいはもっと肩の力を抜いたらどうだ？」

「……これはレオン王。このたびは私のような身分の者をお招きいただき、ありがとうございます」

暇潰しの相手を探そうとしていた矢先にギュネイに近寄ってきたのは、主催者であり国のトップでもあるレオンだった。

美男美女揃いのエルフ族にあっても、飛び抜けた容姿を誇るレオンにギュネイは深々と腰を折る。

「そうかしこまるな。今日は身内だけの集まりだし、私とお前の仲だ」

「もったいないお言葉」

「だからそれをやめろと言っておるのだがな。……まあ、お前の立場や性格では、昔のように振る舞えぬのもわかるが」

再度頭を下げるギュネイに、英雄王が苦笑する。

「ところでギュネイ、少し話があるのだが、いいか？」

「私などと二人きりで話してもよろしいのですか？　また取り巻きのみなさんから叱られますよ？」

人間で、魔術師で、しかも王の信頼が厚いギュネイは、一部の者から疎まれている。ギュネイのような存在が国の中枢で、大きな権力を持つことに不満を持つ者は少ないのだ。

「ふん、知ったことか。……娘たちのことなのだがな」

レオンは、自分よりもずっと背の低いギュネイを部屋の隅に引っ張っていくと、こちらの返事を聞く前に勝手に話を始める。こういった強引さ、マイペースさは、パーティーを組み、冒険をしていた頃と変わらないうとギュネイは少しだけ笑う。

「ほう。マリナ様ですか？ それともミス様ですか？」

「どちらもだ。……お前から見て、二人はどうだ？」

「どう、と言われましても、相変わらぬお二人ともお美しい、としか。レオン王とアイシャ様の血を引かれてるのでから、当然といえば当然ですが」

母アイシャ、長女マリナ、次女ミス、この三人をすべて毒牙にかけた中年魔術師は、しれっと語る。

「そ、そうか」

親バカの王は嬉しそうに目を細める。

「いや、そうではなく、どこか変わったところはないかという意味だ」

「レオン王は、お二人になにか変化があると？」

己の姦計で生じた姉妹の変化に気づかれたのか、とギュネイは探りを入れる。しかし、それは杞憂だった。

「私にはわからんのだ。どうも昔から私はそういったことに疎くてな。まあ、ギュネイもよく知っているだろうが」

「そうでしたね、あなたは旅の途中で何度、無自覚に世の女性たちを泣かせてきたことか」

「おいおい、やめてくれギュネイ。そんな話、間違っても妻や娘たちに言ってくれないよ？」

完全無欠とも思える英雄王にも、女心に疎い、という弱点がある。

もっとも、これのおかげでギュネイは長年恋い焦がれ続けた王妃アイシャや、その愛娘たちを墮とすことができたのだ。

「それはもう手遅れでございます、レオン王」

ギュネイは三度、深く腰を折る。しかし、それは恭しくもわざとらしい。

「実は先日、マリナ様に強くせがまれました、色々と昔話をしてしまったばかりなのです」

「あああつ、なんてことをギュネイ……！ そうだった、お前は昔から、ときどきそういう悪戯を私たちに仕掛けるようなやつだった！ 忘れていたよ！」

レオンもまた、少々大袈裟なポーズで嘆いてみせる。

周りはそんな二人を不思議そうに見ているが、かつて仲間たちと旅をしていたときはこんな雰囲気だったな、とギユネイは懐かしさを覚える。

(ふふふ、こんな感慨を覚えるとは、私もいよいよ歳を取ったという証拠ですね)

身長は低い、横幅のある戦士のような体格の魔術師の顔に、センチメンタルな感情がよぎる。だが、それは本当に一瞬だけだった。

「ご安心を。マリナ様はお父上の活躍話を聞いて満足されておられましたから」

他にも色々満足させてあげましたしね、とギユネイの胸の内に昏い悦びが滲む。

「ほ、本当なのだな？」

「ええ、もちろんでございます」

「ならばいいが……。ああ、それとこれは気のせいかもしれないのだが、マリナとミリスの仲がどこかぎくしゃくしてるように見えるのだ。お前はと思う？」

(おや、レオン王にしては珍しく、ちゃんと気づいてるではありませんか)

善人だが、若干周囲の空気を読む能力に欠けるレオンが娘たちのあいだにある微妙な雰囲気を感じ取っていたことに、ギユネイは素直に感心する。

もっとも、そこに妻であり母親であるアイシャの名が入らないあたりが、レオンのレオンたる所以なのだ。

「……そうですね、確かに久しぶりに再会した姉妹にしては、いくらか硬いかもありません。私でよろしければ、お二人から少し話を聞いてきましょうか？」

「ああ、頼む。お前はマリナともミスとも面識があるからな。二人とも年頃だ、父親よりはギュネイのほうが気楽にあれこれ話せるかもしれない」

そう言うと、レオンは若干ほっとしたような、肩の荷を下ろしたような顔でギュネイの元から去って行った。

(マリナ様に語りかけるなら、あなたほどの適任者はいないのですがね)

重度のファザコン王女の顔を思い浮かべつつ、ギュネイは唇を歪めるようにして笑った。

王から頼みを受けたギュネイは、しかし、すぐには王女姉妹の元には向かわなかった。美しく着飾った二人がちらちらと、複雑な感情が混じり合った視線を自分に注いでいることはわかっていたが、ギュネイは敢えて完全無視を決め込む。

(アイシャ様やマリナ様、ミス様のお美しい姿を間近で拝見したいところですけれど、仕込みを先に済ませておかなければなりませんからね)

ギュネイが向かったのは、少し前から助手として雇っているエルフの青年、コザッ

クだった。こういった場に参加するのは今回が初めてらしく、滑稽なくらいに緊張しているのがわかる。

「どうですかコザック、パーティーの雰囲気には慣れましたか？」

「あ、ああギユネイ殿」

ミスとの約束どおり、ギユネイが王都に呼び寄せた下級貴族の青年は、知った顔を見て露骨にほっとした表情になった。よほど緊張していたらしい。

「さ、最初から緊張し通しです。ギユネイ殿を見習い、堂々としていたのですが」

「慣れますよ、すぐに。場数を踏むことです。ただ、あまり出しゃばると目を付けられますので、最初のうちは隅で静かにしているのもいいかもしれません」

「……軍師殿も最初はそうだったのですか？」

「もちろん。私は人間ですから、もっと大変でしたけどね。会場の隅どころか、外に出ることも多かったです」

いくら大袈裟に語っているが、ほぼ事実だった。ただし、当時のギユネイは今のコザックのようにびくびくなどしていなかったし、声をかけてくれる人物もいた。

「私のときはレオン王があれこれと気にかけてくださったおかげで助かりましたけどね」

「王が自ら、ですか……！」

コザックが目を丸くする。

「レオン王は元々気さくですし、お優しい方ですから。コザックも知っているでしょう？」

「は、はいっ」

雇ってすぐ、ギュネイは偶然を装ってレオンにコザックを紹介している。

コザックは初めて間近で見るエルフの王に緊張していたが、ミリスの父親だから、という理由もあっただろう。

「王から言葉をかけていただくなんて、想像もしてませんでした……！」

その王の愛娘の純潔を奪っておいてよく言う、とギュネイは思うが、コザックはよくも悪くも裏表がないこともわかった。あるいは、まだ精神が大人になりきれていない、と言ってもいいだろう。

（私より長く生きているはずなんですけどね。エルフ族は長寿の分、精神面の成長が遅いところが目立ちます）

もちろん、御しやすいので、ギュネイからするとありがたい。それはコザックに限らず、周囲のほとんどのエルフに対しても言えることだ。

年齢以上に様々な経験を積み、知識を蓄え、学び、研鑽し、修業してきたギュネイからすると、マリナやミリスは無論、レオンやアイシャも未熟な若者のように見える。

(これが、与えられた時間の差、というものです)

大きなパーティーに初めて参加して興奮を隠せないコザックを見ながら、ギユネイは魔法使いとは思えないほどに発達した肩をすくめた。

コザックと別れたギユネイが次に向かったのは、初めて見るドレスを纏った第二王女の元だった。

「お久しぶりでございます、ミリス様」

「……なんの用よ」

ギユネイが自分に近づいてくるのは見えていたはずなのに、逃げることなく待ち構え、しかも気丈に、そして露骨に睨んでくるあたりはさすがだと感心する。そうではなくては、とも思う。歪んだ昂ぶりが尾てい骨のあたりから昇ってくるのがわかる。

「いえ、レオン王にあなたの様子を窺ってくるよう頼まれました。ご迷惑ですが、どうか堪えてくださいませ」

「父様が？　なんでよ。……アンタ、約束を破ったんじゃないでしょうねっ」

「まさか。それとも、彼とのことを誰かから言われましたか？　そんなはずはないと私は断言できますが」

彼とは、ミリスがこっそり付き合っている恋人のコザックのことだ。

「……一応、信じてあげるわ。一応、だけどねっ」

「それで充分でございます」

ミリスと交わした約束のうち、実際にギユネイが果たしたのは半分だけだ。

ミリスとコザックの関係を知る者の記憶を魔法で消去する、という約束は実行していない。なぜなら、第二王女とその家庭教師である下級貴族の青年との関係を知る者は、ほとんど存在しないからだ。

ミリスの執事は恐らく勘づいてるだろうが、あの忠実で聡明な老人が誰かに言いふらすとはとても考えられない。

(まあ、いざとなれば本当に記憶を消せば済むことですしね)

ミリスを籠絡するため、この魔法には寿命が必要だと言ったが、実際にはそんなデメリットはない。高度な知識と技術、魔力、そしてかなりの費用が必要という点では、できるだけ使いたくないのも事実だったが。

「彼からは、なにか言われましたか？ 先程、お二人で話されていたようでしたが」
「なんでそれをアンタに報告する義務があるのよっ」

ミリスとコザックが、パーティーの前に少しだけ話してるのをギユネイは見ていた。二人の関係が周囲に知られると面倒なので、監視するのが目的だった。さすがにここ

では人の目があるとわかっているのだろう、キスもハグも、手を繋ぐこともなかったのは、ギユネイにはありがたかった。

「きっと、その華やかなドレスや、髪留め、普段より大人びた化粧や香水を褒められたのでしょね」

「……！」

チューブトップ型のドレスから剥き出しの白い肩がびくり、と動くのをギユネイは見逃さなかった。自分の予想が当たっていたことを確信する。

（やはり、コザックはこういうところが鈍いですね。仕事に関してはそこそこ使えるのに。まあ、私としては助かりますが）

「何度も同じことを言われるのは食傷気味でしょうけれど、お美しいです、ミリス様。もうすっかり王女の風格が出てきましたね」

姉のマリナにコンプレックスを持つミリスが欲しがりそうな言葉をチョイスしているが、ギユネイの本心であるのもまた事実だった。

（あのお転婆だったミリス様も、このような格好をされればアイシャ様までとは言わなくとも、マリナ様のようになれるのですね）

ギユネイは周囲にあまり人目が無いことを確認すると、遠慮なくミリスの全身を凝視した。卑猥な意図もなくはなかったが、素直に、目の前の王女の高貴な美しさに感

動していたのだ。

「じろじろ見ないでちょうだい。アンタみたいな腐った目で見られたら、肌が穢れてしまっじゃないのっ」

それはミリスもわかっているのか、辛辣な言葉を返しつつも、本気でギュネイの視線から逃れようとはしない。

「私のような者の目ですら惹きつけるほどに魅力的なミリス様が悪いのです。あなたの美しさはまさに罪です……!」

「い、言ってるて恥ずかしくないのアンタ!？」

「おや、コザックはこれくらいのこと、平気で口にしそうですが？」

魔法を使った監視で、あの青年がミリスに齒が浮くような言葉を散々ぶつけていたことをギュネイは知っている。

「お、同じセリフでも、言ってるのが誰かで全然違うのよっ。アンタに言われてもおどましいだけだわ!」

「その点に関しては私にはどうすることもできません。ですが、これだけは重ねて申し上げます。……私があなたに対して捧げる賛美の言葉に、何一つとして嘘はないのだと。……今宵のミリス様は、これまで私が拝見したどのお姿よりも美しいです」

言いたいだけ言って満足したのか、ギユネイは深々と一礼すると、ミリスの前から去って行った。

(ちよっと、なによ、自分だけ好き勝手言って！ なんなのあの男！)

中年魔術師のやたらと発達した広い背中を憎々しげに睨みつける一方、ミリスの耳にはまだギユネイの声が残っていた。

しつこく、何度も繰り返される過剰とも思える賛美の数々は、否応なくあの忌々しい日々の記憶を呼び起こす。

(あいつは、母様の代わりにあたしを辱めるような最低男なのに……)

その一方で、意志とは無関係に女体に切ない熱が広がるのが悔しい。欲しかった褒め言葉のすべてを憎むべき輩からすべて与えられたことに喜んでしまった自分が悔しくてたまらない。

(コザックが悪いのよっ。あたしのドレスも、お化粧品も、アクセサリーも宝石も、香水も、なにひとつ褒めてくれないからっ)

憤る反面、こうなる可能性をあらかじめ覚悟していた自分もいる。

おぞましい契約の日々が終わり、ようやくギユネイを追い出せたあのときも、恋人はリボンの変化に気づいてくれなかった。彼が贈ってくれた想い出のプレゼントだというのに。

(コザック、こっちに来て変わっちゃったみたい……)

久しぶりに会った恋人は、表面上は以前と変わらないように見えた。しかし、ミスは気づいてしまう。今、彼の興味の対象が自分から別のものに移りつつあるのだと。浮気を疑ってはいない。彼が自分を好きでいてくれることも間違いない。

ただ、コザックにとっての一番が恋人ではなく、この王都で見聞きするあれこれに変わってしまったのだ。

(ギユネイのあの執念の何割かでもいいから、コザックにもあればいいのに)

次々と贅辞の言葉をぶつけてくるギユネイとの格差に嘆くミスは、まだ気づいていない。殺したいほどに憎んでいたはずの男を恋人との比較対象にしていることに。

無意識にギユネイを追ったミリスの目が、姉の姿を捉える。

(あいつ、今度は姉様のところにつ)

ギユネイが次に向かった相手は、マリナだった。

自分とは異なり、母アイシャと同じ正装をした姉に対してのコンプレックスが、ミリスの観察眼を曇らす。

もしこのとき、ミスがしっかりとマリナを見ていれば、姉の様子がいつもと違ふと気づいたかもしれない。ギユネイとマリナのあいだで交わされる不穏な空気に疑念を抱いたかもしれない。

けれど、今のミスにはそんな心の余裕はなかった。ギユネイとマリナが、歓談しているようにしか思えなかったのだ。

(なによ、やっぱりアンタ、あたしより姉様と話してるほうが楽しそうじゃないの！
母様と同じ服と、同じ顔の姉様のほうがいいんじゃないの、バカ！)

その感情には、怒りだけでなく嫉妬も含まれていたが、ミス当人にその自覚はない。

(どうせあたしは母様には似てないわよっ。おっぱいだって小さいわよっ。名前だけの、役立たずの第二王女よっ！)

近くのテーブルからワイングラスを掴むと、ミスは激情に任せて一気に煽った。

(ふう、思ったよりも疲れましたね。地位が高くなると色々便利になる反面、煩わしい仕事が増えるのが難点です)

軍事関連のトップだけでなく、国政の様々な分野で役職を持つギユネイは、今日のようなパーティーのほうが忙しい。他国からの来賓をメインに接待すればいい通常の宴に比べて、様々な部署の者から話しかけられるからだ。

無論、そこで交わされる会話は雑談などではない。各界の有力者連中との駆け引き

の連続である。

（こっちにはこの国の政治経済軍事よりもっと重要な仕事が待ってるのですから、邪魔しないでもらいたいものです）

ギユネイにとってなによりも優先されるのは、彼の人生を決めたエルフの妖精、アイシャだ。それに続くのが、彼女の二人の娘、マリナとミスである。

（まあ、この日のために仕込んだあれこれが無駄にはならなさそうで一安心、ですがね）

政治家との秘密裏の会談を済ませて自室に帰ってきたギユネイの傍らには、コザツクの姿があった。

「どうでしたか、政治家との打ち合わせに立ち会った感想は」

「す、凄かったです、その……大人の世界というか、僕みたいな若僧が同席しているのか、ずっと緊張してました」

「ははは、若僧と言ったら、あの中で一番若いのは私ですよ？ 確かに外見は間違いなく私が一番の年寄りでしたがね」

禿頭を撫でながら、まだ緊張した顔の助手エルフを座らせ、自分は棚から酒とグラスを二つ取り出す。

「でも、なぜ僕をあの場に？」

「君はこういういった世界に興味があるのでしょうか？ この王都で、もっと上を目指したいのでしょうか？」

コザックの前に置いたグラスに血を思わせる色をした酒を注ぎつつ、唇の片側だけを持ち上げて笑う。

「そ、それは」

「隠す必要はありません。むしろ、君のような若者は野心を持つべきです」

「……！」

「エルフは長寿がゆえに、どうしても野心というか、向上心が私たち人間などに比べて控え目です。それは美徳でもあります、いつ他国に、他種族に攻め入られるかわからないこの時代では、命取りともなります」

「し、しかし、軍師殿が来てから、我がエルフ王国は連戦連勝ではありませんかっ」

「いくらかはこの国のために寄与できたかもしれませぬ。けれど、それはレオン王あつてのことです」

ギユネイはグラスを傾けつつ謙遜する。

韜晦してるところもなくはないが、レオンがいたからこそ、という点はギユネイも心の底から認めている。

「私は君たちとは違い、短命です。まあ、頑張ってもあと二十年くらいですかね、今

の仕事が続けられるのは」

「たった二十年……」

たった、と言えるのは、コザックもエルフゆえ、だ。

「よって私には、このあいだに後継者を育てる義務もあるのです。たとえばコザック、君もその候補の一人です」

「ぼ、僕が軍師殿の後継者……!?!」

優男の瞳に、隠しようのない野心の光が宿るのを、ギユネイは見逃さなかった。

「ええ、だからこそ私は先程、君を同席させたのです。無論、現時点ではあくまでも候補の一人ですが、まったく見込みのない者にあのような真似はさせません」

「こ、光栄ですっ」

ミリスを魅了した美男子の頬が感動と興奮で赤らんでいく。

「さあ、小難しい話はこちらまでにして、飲みましょう。緊張した場で飲んでも全然美味しくはないですからね。実はこの酒、レオン王から褒美としてもらったものなのですよ」

「い、いいのですか、そのような大切な酒を僕なんかに飲ませて」

「酒は飲んでこそ、です。さあ、乾杯ですコザック」

「は、はい!」

かつん、とグラスを合わせると、野心はあるが人のいいエルフの青年は一気にグラスを呷った。

コザックが酒に酔い潰れて寝息を立て始めてすぐ、控え目なノックの音が聞こえた。ドアを開けると、パーティーのときと同じドレス姿をしたミスが立っていた。

少し前、使いの者を出して、この時間に部屋に来るようにと伝えておいたのだ。様々な弱みを握られてるミスに、拒否権はない。

「おや、ミス様、こんな遅い時間に夜這いとは、このギユネイ、感激と昂ぶりで天に召されそうです」

「ふん、アンタが死んでくれるなら、いくらでも襲撃してあげるけどねっ」

「ミス様相手に腹上死できれば、思い残すことなどなにひとつございません」

「そういう意味で言ったわけじゃないわよ！ 曲解しないでこのクズ！ ほら、とつとと中に入れなさいよ、アンタなんかの部屋に来たのが見られたらこっちが困るんだから！」

ギユネイがなにか言う前に、ミスはどんどん部屋の奥へと入っていく。

「人払いの結界を張ってありますから、その点をご安心ください」

「ふん、アンタの魔法なんて信用できるもんですか。……誰か、先に来ているの？」
二人分のグラスが置かれたテーブルを見て、第二王女が警戒した顔になる。

「ああ、コザックですよ。先程まで男二人で楽しく飲んでおりました」

「コザックが!? ど、どこにいるのよっ」

自分がこんな夜更けに別の男の部屋にやって来た事実を恋人に知られたくないのだろう、ミリスがきよるきよると室内を見渡す。

「大丈夫ですよ、隣の寝室でぐっすりです」

「アンタ、コザックになにかしたの!？」

「なにもしてませんよ。これを二人で飲んでいただけです。レオン王からいただいたものだけあって、実に美味でした。まあ、そのせいで飲み過ぎてしまいましたかね」
テーブルには、数本の空瓶が並んでいる。

「今日のコザックは機嫌がよくて、ずいぶんペースで飲んでましたよ」

「機嫌が、よかった? コザックが?」

ミリスが訝しげにギョネイを見る。明らかに疑っているという顔だ。

「恋人であるミリス様と久しぶりに再会できて嬉しかったのでしよう。ただでさえお美しいミリス様が、今夜はこんな素晴らしいドレスを纏っておられたのです、コザックが浮かれるのも当然かと」

「……そんなわけがないってわかってて言ってるでしょ、ギユネイ。やっぱりアンタって最低だわ」

コザックの自分に対する態度が期待ほどでなかったことに、ミリスはやはり失望しているようだった。

「私が最低な男である点に異論はございませんが、ミリス様への賞賛に関しては、一切の嘘がないことを改めてお伝えしておきます。……あなたは最高の女性です、ミリス様」

ギユネイはその場に跪くと、敬愛する王女の手を取り、その甲にキスをした。

以前であればキスを許すどころか、そのまま頬を平手打ちされてもおかしくなかっただろうが、ミリスは汚らわしそうに睨むだけで、特に拒絶はしなかった。

「ふん、わざとらしい真似を。なにが最高よ。母様と姉様の次、のくせに」

「アイシャ様は私にとって神にも等しい存在であることは認めます。が、私はただの一度も、ミリス様がマリナ様に劣る、などと口にしてはいはずですが？」

「言わなくてもわかるわよっ。今日だって、みんなあたしより姉様のほうばかり見てたじゃない！」

「そうでしたか？ 少なくとも私はミリス様のことをずっと見ておりましたが」
アイシャの次に、と心の中で付け加えておく。

「会場で少しお話ししたときにも言いましたが、今宵のミス様は本当にお美しい。大人びた雰囲気、きつとあの場にいた者は誰しも目と心をあなたに奪われたはずす」

「……一番見て欲しかったひとに気付いてもらえなければ、意味なんてないわ」

つぶやくような声の小ささが、ミスが受けたショックの大きさを物語っていた。

「では、改めてその人物に見てもらおう、というのはいかがですか？」

「えっ。ちょ、ちょっとギユネイ!？」

ギユネイは傷心の姫の手を握ると、強引に寝室へと連れて行く。

部屋に置かれたベッドを見た瞬間、ミリスの表情が強張ったのは、あの悪夢のごとき日々を思い出したためだろう。

「誤解なさらず。ソファをご覧ください、ミス様」

そんなミリスを刺激せぬよう、ギユネイは穏やかな声で部屋の隅にあるソファを指差す。そこには、赤い顔をしたコザックが気持ちよさそうに横たわっていた。

「酔って眠っているだけです。起こしますか？ もちろん、私はここから立ち去りますので、二人きりで甘い夜を過ごしてはいかがですか。ミス様の美しさに感動して、酔いなど一瞬で醒めてしまうことでしょう」

「……」

以前のミリスであれば、ギユネイのこの申し出を受けただろう。しかし、今は、ミリスは恋人の寝顔をじっと見つめたまま動かない。そのどこか悲しげな横顔に、ギユネイは内心、己の勝利を確信していた。

（どうやら気づいてしまったのですね。彼の心の中では、すでにあなたが一番ではなくなっただけのこと）

王都に出てきたコザックの目の前には現在、ミリスの家庭教師だった頃とは比べものにならないほどの刺激が広がっている。今でもコザックの最愛の女性はミリスのままであっても、最も興味ある事柄の座でないことはもはや明白だった。

そしてミリスは、それに気づいている。気づいてしまったのだ。

（ああ、思い悩むミリス様の横顔もお美しい……物憂げな瞳は、どんな宝石よりも深い輝きを放っておられる……！）

恐らくは久しぶりに再会する恋人のために精一杯着飾ったのだろう。大人っぽいデザインドレスを選び、髪をまとめ、メイクをし、香水を纏い、コザックからの賞賛の言葉を欲したはずだ。

それが、恋する乙女のささやかな、けれど切実な願いだったことは想像に難くない。この気の強い少女の緊張と期待、不安を思うだけで、ギユネイですら胸が疼く。

「……酷い男ですね、コザックは」

自分の口から発せられた低く、不機嫌そうな声に、ミリスのみならずギユネイ本人も驚いた。どうやら、思っていた以上にコザックに腹を立てていたらしい。

「ミリス様のこのお姿を見てなにも言わないなど、万死に値する罪です。神の雷に灼かれても文句はないでしょう」

長い耳の近くで言いながら、ギユネイはミリスを背後からそっと抱き寄せる。身長差があるため、剥き出しのうなじが目の前に現れる。

「さ、触らないでっ」

「ああ、ミリス様は罪深い方だ。どうしてこんなにお美しいのです。どうしてこんなに色っぽいのです。どうしてこんなにいい匂いをするのです……!」

「やあ……っ!」

ギユネイの唇が、わずかに汗ばんでいた肌に触れた刹那、ドレスに包まれたミリスの肢体が震えた。

「やめな、さい……この、無礼者……ひい!」

ミリスは振り払おうと身体をよじるが、ギユネイはかまわずに白い肌にキスの雨を降らせ、ときおり舌を這わせて汗を舐め取っていく。

「あっ、んっ、やめっ……きっ気色悪い、のよ……この……ンン!」

チューブトップ型のドレスのため、肩や背中中の素肌が露出しているのがミリスには

仇となった。あの淫らな日々で性感帯を知られてしまったミスがこぼす声が、徐々に甘く、湿り気を帯びたものに変化する。

「最高でございます、ミス様……あなたは私の女神です……！」

「うるさい、のよ……黙りなさい、このクズ……人間の分際で、あたしに触れるだなんて、百年早い……あっ、ひゃあうん！」

一際甲高い声が寝室に響いたのは、ギユネイがぴったり閉じられていた腋に強引に舌をねじ挿れたためだ。熱い粘膜が鋭敏な腋窩を這い、肩や背中よりも濃密な汗を舐め取る。

「んあん、あっ、やら、どこ、舐めてえ……ヒッ！」

抵抗が弱まったのを感じたギユネイは、ここで力任せに王女の両腕を持ち上げた。間髪を容れず、剥き出しになった白い窪みに唇を押しつけ、舌を這わせ、わざと音を立てて匂いを嗅ぐ。

「素晴らしい味と香りです、ミス様……この世のどんな酒よりも芳醇な味と香りでございます」

「イヤ、イヤァ！ それダメ、ダメって前にも言った、腋は弱いつて知ってる、くせにいい！ はおおッ！」

万歳をするように両手を持ち上げられ、無防備な両腋を蹴られたエルフの瞳に涙が

浮かぶ。ドレスと同じ色のオーバーニーソックスに包まれた長い脚ががくと震え始め、今にも床に崩れ落ちそうだった。

「私にこうされるのはおいやですか？」

「あ、当たり前、よ……放しなさい、ギユネイ……んおん！」

女のフェロモンが強く滲み出してきた腋を甘噛みされ、ミリスがまた大きく跳ねる。「では、コザックに助けを求めたらいかがです？ 大声を出せば気づいてくれますよ、きつと」

「……っ」

ミリスはソファで眠りこける恋人を見る。そして、ゆるゆると首を左右に振った。
(ふふふ、やはり、ですか。狙いどおりです)

ギユネイの卑劣かつ淫らな罠にかかる以前のミリスであれば、とっくに大声を上げて恋人に助けを求めていただろう。

だが、現在のミリスは違う。

こんな遅い時間にギユネイの、男の部屋を王女がこっそり訪れたという事実を誰かに知られたくない以外にも理由があるのだ。

「あなたは、喘ぎ声すら天界のもののように可憐です、ミリス王女。あなたの汗の珠一粒は、宝石と同じだけの価値がある」

「やあぁっ、やめっ、耳、らめっ……ひゃううっ!!」

赤みを帯びてきた長い耳を少し強めに噛んだ途端、エルフの姫は大きく背中を湾曲させながら痙攣した。弱点である耳を責められ、軽いアクメを迎えたようだった。

(相変わらずマゾっ気がありますね。ですが、そこがたまらなく魅力的です)

あの夢のような(ミリスにとっては悪夢のような)日々で、ギユネイはこの少女の性的特徴をかなりの部分、把握したという自信がある。強気な性格とは裏腹に、軽度の痛みや拘束、羞恥に対して敏感に反応することもとくに知っているのだ。

「いい調子です、ミリス様。そのまま愛らしい声を上げ続ければ、きっとコザックも目を覚まし、文字通りのお姫様であるあなたを助けてくれることでしょう」

「う、うるさい……黙れ、このへんたいひいっ!」

今度は、反対側の耳の先端を噛んでやった。途端に、ミリスはその場に膝から崩れ落ちてしまう。小振りのヒップがびくびくと跳ね上がるのは、絶頂の波を食らった証だ。

(おやおや、ずいぶんと敏感ですね。私からするとありがたいことですが)

立てなくなったミリスを軽々と抱き抱えたギユネイは、躊躇せず真っ直ぐベッドへと向かった。自分よりも身長は高いが、体重は驚くほど軽い少女をそっとベッドに下ろすと、着ていたものを脱ぎ捨てていく。

「えっ……えっ……あっ、アンタ、なにをしてるのよ!? ふ、ふざけないで、許さないわよ、この悪魔……きゃあっ!」

浅かったとはいえ、連続で達した余波でぼんやりしていたミリスの意識が戻ったときにはもう、ギユネイは全裸になっていた。発達した筋肉と濃い体毛は、魔術師というよりも屈強な戦士といったイメージだ。

身長は平均的な人間種族の男よりもやや低い一方、横幅がある。中年を迎え、デスクワーク中心となった今でもなお、鍛え続けた賜物だ。長い冒険者生活の中で、結局最後は己の肉体と精神力とが生死を分かると身を以て学んだ結果である。

「いかがされましたか、姫様」

そして、身体を鍛えている理由の中には、女を抱く際に必要だから、というものも当然含まれている。アイシャを、マリナを、そしてミリスを墮として以降も、ギユネイの鍛練は続いていた。以前よりも激しいほどだ。この先に待っている、背徳の極み、淫靡な宴に備えてのことだ。

「私の醜い身体など、もう何度も見たでしょうに。見ただけでなく、触れ、抱き締め、口づけ、舐め、ときには爪や歯を立てたりもしたではないですか」

「うるさいうるさいうるさいっ! 黙りなさい、ギユネイ! そ、それ以上あたしを侮辱する発言は許さないんだから!」

寝転ばされた状態で睨んでくるミリスは、しかし、ベッドから逃れようとはしない。逃亡を企てたり抵抗しても無駄と観念しているのかは不明だが、時折ギュネイの股間に向けられる目が妙に潤んでいることだけは確かだった。

「侮辱など……。もう幾度も繰り返してお伝えしたように、私は心の底からあなたを、ミリス様を敬愛しております。確かに己の愛情表現が歪んでることは自覚してますが、あなたに対して侮辱といった感情は一切ございません、我が女神よ」

ミリスの視線でより漲ったペニスをアピールするために揺らしつつ、ギュネイは真っ直ぐに王女の瞳を見つめる。

（ああ、期待されてるのですね。私の腕の中で切なく身悶え、泣きながら牝の悦びを極めたあの日々を思い返してくれてるのですね……！）

悪辣な罫を駆使してミリスの瑞々しい女体を嬲り、味わい、そして自分好みに躰けた、夢のごとき毎日の記憶がギュネイの脳裏に鮮やかに甦る。同時に、禍々しい獣欲によって怒張がさらに鋭角に持ち上がり、憐れなエルフの姫を貫かんとその体積と硬度を増していく。

「ご承知のとおり、私のこの貧相なペニスは、長大なエルフのそれには及びません」
「……っ」

セリフで、ミリスの視線を股間へと向けさせ、また、コザックの勃起との違いを意

識させることにも成功する。

エルフの男性器は背の高さに比例して人間よりも長いが、太さや硬さなどは劣る。そもそも、長寿のせいか、それほど性欲が強くないのだ。特に男のエルフは総じて淡泊で、女の側から誘わないとなかなか行為に至らないとも聞く。

「しかし、それでもあなたを前にすると私の分身は見てのとおり、暴れ馬と化すのです。愛しいミリス様を想う気持ちがかうさせるのですよ」

「た、ただアンタがケダモノってだけじゃないのよ。あ、あたしは母様の身代わりなんでしょ！」

「アイシャ様はアイシャ様、ミリス様はミリス様です。……それはもう、何十回も、何百回も、この可愛らしい耳元で囁いたはずですが？」

「ンン……ッ」

ギュネイはミリスに覆い被さると、真っ赤に染まった長耳に息を吹きかけながら囁いた。同時にドレスの上からそっと乳房に触れ、優しく、壊れ物を扱うように丁寧に揉んでいく。

「こ、こら、誰が触っていいと……ど、どきなさい、薄汚い人間！ 叫ぶわよ、助けを呼ぶわよ、アンタなんて、一発で身の破滅なんだからねっ！」

「かまいません。あなたに、ミリス様に命を絶たれるのであれば、このギュネイ、至

福の極みで冥界へ旅立てましょう」

ミリスがそんな真似はしないと重々承知した上で、ギユネイはさらにバストへの愛撫に熱を込める。

「ああ、これはいいドレスですね。落ち着いた色とデザインで大人っぽさを、そして多めのフリルで同時に愛らしさも表現していて、まさにミリス様にふさわしい衣装です」

ミリスが逃げられぬよう太腿で細い腰を挟み込みつつ、ドレス越しに胸の膨らみを愛でる。母や姉と比べるとずっと慎ましやかなサイズだが、ギユネイにとっては関係ない。ミリスの乳房というだけで充分なのだ。

「やめ、て……やめなさ……ああ……くっ……し、信じられない……こんな……無理矢理あたしを……王女であるあたしを辱めようだなんて……っ」

か細い腕がギユネイの胸を押し返そうとするが、その力はどこまでも弱々しい。むしろ、胸板の厚さと逞しさを確かめるように指が動いている。

もし、ここでミリスが本気で抗ったとしても、腕力は圧倒的にギユネイが上だ。また、その気になれば魔法もあるので、ギユネイの圧倒的優位は動かない。

それはミリスも当然理解しているだろうが、この弱々しい抵抗には他にも理由があるはずだ。

「ふふふ、愛するコザックとのまぐわいは、私のそれと比べていかがでしたか？」

「な、なにを……あっ、イヤ！」

部屋の隅で寝息を立てているコザックの名を出すと同時に、ドレスと下着を一気に下ろし、小振りな、けれど形よいバストを露わにする。ぷるぷると震えながら現れた膨らみの頂では、早くもピンクの突起が物欲しげに尖っていた。

「この、神が描いたような曲線を揉まれましたか？　どんな花よりも可憐なこの蕾を吸われましたか？　優しい声で愛の言葉を囁かれ、敏感な耳を舐められましたか？」

「イヤ、イヤ……やめ……やめて……触らない、で……ああ……ダメ……ギユネイ、許して……こんなのは、イヤ……ァ」

ダイレクトに乳房を揉まれ、隆起した乳首りをつままれ、耳を甘噛みされたエルフの美姫が、どこか甘えた声で許しを請う。ギユネイを嫌悪する心と、肉体に刻み込まれた愉悦のフラッシュバックとに挟まれ、混乱しているようだった。

（思っていたよりも調教の成果は残っていてくれたみたいですね。これなら、考えていた以上にスムーズに事を運べそうです）

早くも牝の反応を示し始めたミリスを見下ろし、ギユネイは唇を歪め、邪悪な笑みを浮かべた。

(ああ、なんとか、なんとかして切り抜けないと……このままじゃまた、こいつに、人間なんかに穢されちゃうっ)

王女の理性はずいぶん前からずっと警報を鳴らし続けているのだが、肝心の身体が動いてくれない。助けを呼ばなければならぬ口からは、まるでコザックに愛されるときを思わせる甘い声が出てしまっし、ギュネイを押し退けようとする手脚には全然力が入らない。

「ミリス様はどんなお姿でもお似合いです、今日は特別に素敵です。この髪留めも、あなたの魅力をさらに引き出してますよ」

髪と一緒に頭を優しく撫でられた。嫌悪感を覚えなくなっていることがなにより恐ろしい。

(このシュシュ、今夜のパーティーのために用意したのに。コザック、私の服も、メイクも、香水も、なにひとつ褒めてくれなかった。ううん、気にもしてくれなかった)

ミリスはもう気づいていた。恋人にとっての一番がすでに自分から移ってしまっていたことに。

「この敏感なお耳も、ふっくらとした唇も、弾力に満ちた乳房も、あなたは最高の女性です、ミリス王女」

耳を噛み、唇を指でなぞり、乳房を揉んだギュネイが恍惚の表情で言う。

(あ。こいつ、またこの顔……)

うっとりとした表情で自分を見つめるこの顔を、ミリスはすでに知っていた。ギュネイが本当に自分を神聖視し、崇め、敬っているときに見せる表情だった。

かつてのコザックでも、ここまで無防備な、ストレートな愛情表現はしてくれなかった。

(な、なにをコザックと比べてるの、あたしっ。違う、こいつは敵、最低最悪の犯罪者、なのよっ。いつか父様に言っ、処刑してもらおう極悪人なんだから！)

徐々に自分から興味を失いつつあるのがわかるコザックと、その性根と手段は卑劣ながらも、向けてくる想いそのものは真っ直ぐなギュネイを無意識のうちに比べてしまふ。それ自体がもう、恋人に対する裏切り行為だった。

「ミリス様……ああ、ミリス様……！」

「あっ、ダメ、耳、そんなにしやぶられたら……噛み噛みされたらあ……はおッ」

ギュネイによって見つけられ、開発されてしまった耳の性感帯を唇と舌と歯とで責められる。これだけでもたまらないのに、この魔術師は両手で巧みに左右の乳房を揉み、その頂点の突起をこね回し、エルフの王女を悶えさせてくる。

(こいつの触り方、ダメッ……なんでよ、どうして気持ちイイのよお……ああっ、コ

ザック、違うの、あたし、ホントに感じたくなんてないのよお！)

同じ部屋の隅で寝息を立てている恋人を起こさないよう、ミリスは懸命に唇を閉じる。幸い、よほど深く酔っているのか、ソファの上のコザックが目を覚ます気配はない。だが、すぐ側にコザックがいるという事実だけで、ミリスには十分な脅威だった。「いかがですか、私の愛撫は？ やはりコザックのほうが気持ちイイですか？」

「あ、当たり前よ……こ、このケダモノ……はあああ、あっ、い、いい加減、やめないと、ひどい、わよ……くうん！」

涙で滲んだ目で睨みつけた直後、浅ましく勃起した乳首を軽くねじり上げられた。鋭敏な尖りから痛みと、そしてその数倍もの快感が発生する。

「やはりミリス様は、多少痛みを伴うほうが悦ばれるんですね。コザックも当然、あなたのこの嗜好は知っているのでしょう？」

「う、うるさい……黙れと言って……やっ、あっ、ダメ、おっぱいは、先っぱはもうダメーッ！ ヒイッ！」

ねじられた直後でじんじんと疼く突起が、ギュネイの口に含まれた。ぬらりとした舌で舐められるだけでもつらいのに、この魔術師はさらに、前歯で乳首を甘噛みしてくる。

「んぎっ、やあっ、やら、それ、やらあ！ アアア、噛むの、やら、やらってえ！」

乳首は優しく扱われるべきものだと思っていた王女に、この背徳感溢れる愉悦を教えたのはギユネイだった。その男からの容赦のない、そして腹立たしいくらいに絶妙な乳首責めに、ミスはベッドの上であられもなく乱れた。

(ダメ、ダメ、これ、凄い……思い出しちゃう、あたしの身体、こいつのこと、全部思い出しちゃうッ)

ここまでギユネイは、キスも、そして下半身へのタッチもしてこない。それが逆に怖かった。耳と胸だけの愛撫でここまで反応してしまった自分の肉体を、もう信じられなかった。

「さあ、ミス様、そろそろ私のものにも慈悲をくださいませ」

呆然としているミリスの手に、熱くて太くて硬いなが握らされた。それが忌むべき者のペニスだと気づいた刹那、ミリスの下腹部が妖しく疼く。

「な、なんてももの、握らせるのよ……し、信じられない……最低……は、恥を知りなさい、このケダモノ……!」

ミリスの小さな手では握りきれないほどの太さと、逞しい拍動に、先程生じた疼きがどんどん大きくなっていく。己の秘所が浅ましく濡れてしまっていることも、ミスはもう気づいている。

「おっ、おっ、おお……そ、そうです、そこが私の弱い場所、です……おお……ミ

リス様にしごかれるとは、光栄の極みで、ございます……くお……ッ」
望まぬテクニックを仕込まれた第二王女の手コキに、ギュネイが呻く。

（ふん、知ってるんだから。アンタ、ここをこうするとすぐに喘ぐんでしょ？ とつととイッチャいなさい、今ならまだ見逃してあげてもいいんだから……！）

どうにか手だけで射精させれば、と考える一方で、この男の劣情が一度くらいで治まるはずがないともミスは思っていた。期待してはならないなにかを期待している自分から、意図的に目を逸らしていた。

「くっ……さ、さすがですミス様。ですが、このような素敵なお姿のあなたを蹂躪できる機会など、もうないかもしれません。手で果ててしまうのはもったいなさすぎます」

ミリスの手から肉棒を引き抜くと、ギュネイはついに憐れな獲物に止めを刺しにきた。ドレスとお揃いのオーバーニーソックスに包まれた足首を掴み、徐々にミリスの股を左右に割っていく。

ドレスのスカートが捲れ、ショーツが卑劣な男の前に晒される。

（見られた……こいつにまた、あたしの下着、見られちゃったあ……）

大量に分泌された愛液によってショーツはすっかり濡れそぼり、無毛の恥丘や、昂ぶりによってわずかに膨らんだ陰唇が透けてしまっていた。

「見るな……見るな、バカァ……ああ、助けて……誰か……ひい！」

ミリスはまだ気づいていなかった。自分が助けを求めたのが同じ部屋にいる恋人ではなく「誰か」であったことに。

一方のギユネイはそれに気づき、口元に笑みを浮かべつつ、凶悪な肉槍を王女の股間へと近づけてくる。

(ヤダ、おっきい……こいつのオチン×ン、やっぱり怖い……！)

コザックのそれと比べて明らかに二回りは大きい亀頭は赤黒く、グロテスクな印象を与える。ミリスの手首ほどはあろうかという極太の肉幹に巻きつくように浮かび上がる血管は、邪悪な大蛇を連想させた。

「ふふふ、せっかくのドレスと下着ですからね、今日はこのままいたしましょう」

ギユネイは手を使わずに、イチモツだけで器用にショーツを横にずらして姫エルフの秘所を露わにする。この際に硬い牡莖でクレヴァスや陰核が何度も擦られ、ミリスに望まぬ、けれど甘い愉悦を送り込んできた。

(わざとやってる……こいつ、絶対にわざとお……)

ミリスは腰を揺すってギユネイの擦りつけから逃れようとするが、それは端から見れば、挿入をせがむ淫らなおねだりだった。散々いじられてツンと尖ったままの乳首や、新たにワレメから滲み出てくる愛液もその印象を裏付ける。

「ああ、またこの狭い穴に挿れられる日が来るとは、夢にも思いませんでした」

(嘘、びっくり……どうせ最初からこうするつもりだったくせに……あたしのこと、ずっと慰み者にする気だったくせにい)

コザックとの関係をばらすと脅し、猥褻な行為を繰り返し、想像もしなかった淫らなプレイを無理矢理仕込んできた憎むべき男。それなのに、自分の肉体は勝手に反応してしまるのが悔しくてたまらない。

「よく濡れてますよ、ミス様……ああ、このつるつるでぬるぬるしたワレメと窪みが私を狂わせるのです……!」

ギユネイは執拗に勃起を姫割れに押し当て、擦りつけ、ミリスの心と身体を蹴ってくる。挿入されたくないという心と、今すぐにでも貫かれないという女体の狭間で、ミリスはただただ涙をこぼし、恥辱に震えるしかできない。

「お、犯すなら、さっさとなさい、この変態……! ア、アンタのなんて、全然、気持ちよくなんか、ないんだからね! あたしが感じるのは、コザックのだけ、なんだからあ!」

持ち前の気の強さでそう言い放つが、声はもう完全に震えていた。恐怖ではなく、快感によって、王女の声は甘く溶かされていた。

「ええ、もちろんでございます。ですからこれは、私の身勝手な自慰行為です。私だ

けが気持ちよくなります。申し訳ありませんが、ミリス様はしばしのあいだ、我慢してください。……ふっ！」

「……ッ!!」

ぬちゅり、と卑猥な水音のち、怒張がミリスの蜜洞を押し割った。巨大な肉塊が己を貫く恐怖に身構えるが、幸いにして痛みはなかった。否、痛みがあったほうがミリスには幸せだったろう。

「はおおオッ！　ンオッ……おうン!!」

容赦なく膣道を穿つ勃起から与えられる快感に、ミリスはもう声を、女の嗚咽を止められなかった。恋人との行為では味わえなかった強烈な牝悦に、ドレス姿の王女はベッドの上で大きく仰け反る。

（あたし、なんて声を……そこにコザックがいるのに……!）

己の発した声に慌てて口を手で塞ぐが、それを見たギュネイの唇が邪悪に歪む。獲物が抵抗すればするほどに残酷になれるのがこの魔法使いの本性なのだ。

「痛くて苦しいでしょうが、もう少しだけ堪えてください、ミリス様」

ミリスが痛みも苦しみも感じてないのを百も承知の上で、わざとらしく申し訳なさそうな顔をしてくるのが憎たらしい。今すぐにも頬を叩いてやりたいくらいだが、ミリスの手は己の口を塞ぐので精一杯だ。ちょっとでも油断すれば、恋人の横で出し

てはならない声が漏れてしまうだろう。

(我慢よ、我慢っ。大丈夫、その気になれば絶対に耐えられる……愛のない行為で感じるわけ、ないんだから！)

ミスは敢えて目を閉じずに、自分を凌辱する男を睨みつけることにした。下手に視界を閉ざすと、意識が肉体に集中して逆効果だと学んでいたからだ。

が、それは、女体がすでに肉欲に屈したと認めていることに等しい。

「ふー、ふー、ふー……っ！」

「そんなに睨まないでください、ミス様。ですが……ああ、あなたはそのような表情もまた美しい……最高です、最高ですよミス様……おっ、おっ、おおう！」

ギユネイのピストンが徐々に速く、深く、強くなってきた。大量の愛蜜を纏った剛直が、スムーズに膣道を往復する。

「ひっ、ぐっ、んんっ……ふぐっ、むっ、んぐううっ！」

一往復するたび、媚壁を抉られるたびに、あの恥辱の記憶が甦ってくる。忘れたいと願った、おぞましくも甘い女の幸せが急速に第二王女の全身に拡散していく。

(声、出る、出ちゃう……ダメ、我慢、しないと……こんなの、気持ちよくなんか、ないんだから……アアッ)

両手で口を押さえたまま、顔を左右に振って快楽をシャットアウトしようと抗う。

だが、淡々と打ち込まれる肉棒に、美しきエルフの女体は確実に屈しつつあった。

(こいつ、ズルい……ズルい、よお……もう、知ってる、あたしのイイところ、全部わかっている……コザックだって知らない場所、ごんごん叩いてくるの……お)

子宮口の少し手前、膣道の上側がミリスの最も弱いスポットだった。ここを強めに、媚粘膜を押し潰すように抉られると、ミリスはすぐに高まってしまふのだ。

「おや、どうかされましたか？　痙攣するほどに痛くて苦しいのですか？」

ミリスの性感が急速に上昇しているのをわかった上で、わざわざ言ってくるのが憎たらしい。そして、そんな男によがらされている事実がどうしようもなく悔しい。

「ああ、これは失礼。口を塞いだままでは返事などできませんでしたね」

そう言うのとギョネイは、口を塞いでいたミリスの両手をシートへと押しつけた。

「やめっ……バカ……あっ、あっ、やめへえ……んひっ、あっ、あっ、はほおっ」

かろうじて押し殺していた嬌声が一気に部屋へと響く。慌てて恋人を見るが、起きる気配はない。

「ご安心を。彼はそうそう簡単に起きませんよ。いざとなったら私が魔法でもう一度眠らせますし」

「そ、そういうことじゃ……あうっ！　ふか、深いっ！　らめ、そこ、ばっかりい……ひっ、ひっ、んひいいっ！」

一度漏らした声は、もう止められなかった。また、そんなミリスの痴態に滾ったのか、ギユネイのピストンのギアが一段上がる。

一突きごとに身体があの日々の記憶を思い出す。濡れた膣粘膜が勃起に吸いつき、乳首とクリトリスがはしたなくその体積と硬度を増していく。

「んおっ、ほおっ、んおオ……ッ！」

子宮を揺らさんばかりの強烈な一撃に、全身に鳥肌が立つ。長い耳の先端が熱を帯び、強すぎる快感の前に涙と涎が溢れて止まらない。

(負けちゃ、ダメ……あたし、もう負けたくない……こいつにイカされたくないのお……助けて、このままじゃまたイク……ギユネイの前でイッちゃう、オマ×コ、とろとろに溶かされちゃうのお！)

生来の負けん気の強さと、王族としてのプライドがミリスに最後の抵抗を試みさせる。だが、少女は気づいていない。己の女体はすでに、この人間の牡にとっくに屈服し、敗北していたのだと。

「ああ、いい声ですよミリス様。あなたは喘ぎ声ですら美しい……っ」

「誰がっ……あひっ、あっ、はっ、奥の、そこ、やああ！ ああっ、声、出ひゃうのお！ おっ、おっ、んおおっ！」

愛くるしい容姿に似つかわしくない、生々しい嬌声はますます大きくなっていく。

(「イイ、イイ、悔しいけど、気持ち、イイ……！　あたしの感じるところ、全部知られてる………な、なに？」)

ここまでずっと自分の顔を視姦し続けてきたギュネイの目が、別のところを見ていた。その視線を追ったミリスの表情が強張る。ソファのコザックが軽く呻きながら寝返りを打ったからだ。

「……ッ！」

ミリスはようやく思い至った。理解した。どうしてギュネイがわざわざ酔い潰れたコザックを寢室のソファまで移動させたのかを。最初からミリスの心を凌辱する用意だったのだと。

「おおっ!?　今、凄く締めまりましたよ、姫様。やはり恋人に見られるのはイヤですか？　人間の魔術師などに組み敷かれ、チ×ポをマ×コにねじ込まれ、乳首とクリを勃起させ、マン汁を垂れ流してアへるところは隠したいですか？」

「ヒイイイッ！　イヤァ！　言うな、言うなぁ！　あっ、あっ、あおおおんッ！」

ミリスの羞恥心を煽るための卑猥すぎる言葉責めに加え、ギュネイの腰使いがより凶悪になった。ここで一気にミリスを牝悦の沼に沈めるつもりだとわかった。

(コザック、起きないで、お願い、そのまま寝ていて！　あたし、違うの、ホントにこれは違うの！　信じて……ああ、あああ！)

心の中で懸命に言い訳を繰り返す一方で、ミリスの身体は真逆の反応を見せていた。顔と目はコザックに向けつつ、両手と両脚はギュネイの逞しい首と腰とに回され、荒々しいピストンに合わせて尻を浮かせ始めていたのだ。

「やああ……これ、もう、やらあ……おっ、おっ、はほお……ッ！」

パーティーのために着飾った高貴なエルフの姫が、まるで発情期の獣のような声を発しながら凌辱者にしがみつき、浅ましく腰を振る。

結合部からは泡立った本気汁が溢れ、無毛の恥丘を汚していた。

(思い出した、全部、思い出したあ……あたし、これ知ってる……このオチ×ポに、オマ×コと、子宮、がんがいじめられる気持ちよさ、思い出しちゃったあ……イイの、イヤなのに、凄く、イイのお……頭の中、ちかちかするのお！)

忘れようとして、しかし決して忘れられなかった背徳の肉悦が今、急速に甦ってくる。否、あの悪夢の日々よりもさらに威力を増した快感が少女を襲っていた。

「だいぶ戻って来たようですね。その調子です……くうっ、こ、この締めつけ、やはりあなたは最高ですよミリス様」

「むむっ!？」

突然、呼吸が苦しくなった。ギュネイにいきなり唇を奪われたためだった。

(ひどいっ、キスはイヤ、隣にコザックがいるのに、こんな……ああっ)

ここまで唇はほとんどノーマークだったせいで、完全に油断していた。おかげで、ぬるりと侵入してきた舌を押し返すこともできず、口内まで蹂躪されてしまう。

「むちゅ、ちゅ、ずちゅっ……ンン、ふっ……んんうん」

舌を絡められ、唾液を啜られる。粘膜と粘膜が触れ合う快楽に、勝手に甘えたような鼻息が漏れるのが恥ずかしい。

(やめなさい……やめて、こんなキス、ダメ……恋人同士がするみたいなキス、しちやイヤ……ああ、あたしの唾、そんなに吸わないでってばぁ！)

信じられないくらい強く舌と涎が吸われる。一緒に魂まで吸い取られそうな恐怖に、無意識にギュネイにしがみつくと手脚に力が入る。

もちろん、ディープキスをされているあいだもピストンは止まることなく、ミリスの蕩け穴を犯し続けていた。

「んぶっ、ふっ、ふむぐうっ！ んむっ、ふむ、むふウン……！」

剛直が子宮口を揺らし、その手前のスウィートスポットを擦る。

舌を舐られ、逞しい胸板に勃起乳首を押し潰される。

頭を優しく撫でられ、鋭敏な耳をいじられる。

そのすべての責めが、エルフの王女の心と身体を籠絡しようとしてくる。

(あっ、来てる、イクのがもう、そこ、すぐそこにい！)

小さなオルガスムスはすでに何度か迎えていたが、それらとは比較にならないほどの大波が接近していた。恋人との行為では経験できなかった女の頂点の到来を予感し、ミリスは脅え、それ以上の期待に身震いをする。

(声、出ちゃう……あたし、イクとき、すっごい声、出しちゃう……コザックが起きちゃう、あたしがこいつに犯されてイッちゃうの、バレるの、イヤぁ……!)

もはや、望まぬアクメの回避は無理だった。敗北は確定していたのだ。

あとはもう、できるだけ傷口を広げずに、最悪の事態を回避するほかはない。

(ごめんね、コザック。これは違うの。あなたにあたしの浅ましい声、聞かれたくないから、しかたなく、なの。許して……)

脳が溶けそうなくらいの甘く熱い快感の中、ミリスがかろうじて思いつけた対策は、このままギユネイとの深い接吻を続け、少しでも嬌声を押し殺すことだった。

そんなミリスに対し、ギユネイは今度は唾を流し込み、王女に嚙下を要求してくる。

(イヤ、イヤ……こんなやつなんて、飲みたくない、のに……い)

しかし心とは裏腹に、ミリスは喉を鳴らし、その液体を飲み干す。身体の内側から犯されるようなおぞましさに涙が滲むが、被虐の悦びもまた新たに生じてしまう。

「むっ、ぐっ、ふっ、ふぐむうう! んくっ、くっ、ンンン……ッ!」

全身で男にしがみつき、腰を揺すり、互いの唾液を交換するその姿は、もはや完全



に愛し合う恋人同士のものだった。

(ヤダ、こんなのヤダ……なんで気持ちイイのよ、どうしてコザックのオチ×ポより感じるのよお……あたしの身体、もう、元には戻れないの……?)

亀頭で子宮を小突かれ、エラで性感帯を擦られ、エルフの誇りである耳を指でねじられながら、ミリスはいつの間にか、自分からも舌を蠢かしていた。ギュネイとのデープキスに溺れていた。

(あっ、来た、来ちゃった……イク、あたし、イク……ちゅーちゅーしたまま、オマ×コ、ぐちゅぐちゅにしながら、すっごくイッチャう……気持ちよくなっちゃうのお……あっ……あああ!!)

視界が真っ白に輝いた刹那、ミリスはギュネイと密着しながらアクメに達した。

「ぐっ……ぐう……っ！」

そんなミリスのあとを追うように、ギュネイが低く唸り、腰が絞られた。

(嘘……こいつ、中に……あたしの中に……い！)

女が最も守らなければならない小部屋に容赦なく放たれるザーメンの量と熱さにミリスは絶望し、そして絶頂した。

(熱いの、ダメ……中出しの気持ちよさ、思い出しちゃうからあ……ダメ……あたし……あたしい……ああっ、またイク……続けてイク……ッ！)

お腹の奥に広がる牡のエキスに、王女は連続してオルガスムスを迎えさせられるの
だった。